

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

| | |
|------------|---|
| Title | R・W・グリーン編「プロテスタンティズムと資本主義：ヴェーバー論文とその批判者達」 |
| Author(s) | 西村, 武 |
| Citation | 歴史研究(32): 84-88 |
| Issue Date | 1966-12-18 |
| URL | http://hdl.handle.net/10109/8051 |
| Rights | |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

R・W・グリーン編

「プロテスタントイイズムと資本主義

——ヴェーバー論文とその批判者達——」

西村武

プロテスタントの改革、その中でも特にカルビン派が、近代資本主義の発展に決定的な影響を及ぼしたであろうか。この問題は、マックス・ヴェーバーの「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」と題する論文が発表された一九〇四―五年に端を発し、既に半世紀以上にもわたって学問的論争の焦点となってきた。既に早く、W・ゾムバルトは著名な研究「近代資本主義」において、近代資本主義の発展過程における主導的な力の一つとして、いわゆる「資本主義の精神」なるものの重要性を強調したが、ヴェーバーはゾムバルトの仮説を受けて、「資本主義の精神」の起源を推測し、この決定的要因がカルビニズムの宗教倫理の一種の副産物とし現われたことを論証したのであった。問題が歴史学、経済学、宗教学等多くの学問的分野に関係したので、この主題をめぐる多数の学者によるさまざまな角度からの研究が相次いであらわれた。それらの大部分はヴェーバーの論文への批判であり、それに対するヴェーバ

ーの反批判も加えて、この問題の研究史はそのまま論争史とさえなっている。しかし、ヴェーバーがこの論争で殆んど孤軍奮闘しているながら、不幸にして論争自体はヴェーバーとその批判者達の論点がかみあわされないままに進行してしまつた。論争における混乱の最大の原因は批判者達がヴェーバーの意図するところを十分に理解せずにヴェーバーを攻撃しようとしたことであつたと思われる。

大塚久雄氏のすぐれた業績は、こうした論争の混乱を丹念に解きほぐし、批判者達のヴェーバー理論に関する誤読や誤解がどこにあつたか、またそれが如何にして生じたかを明らかにしている(大塚久雄「ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」大塚・安藤・内田・住谷著「マックス・ヴェーバー研究」岩波書店、所収)。大塚氏は批判者達の誤解をむしろ逆用して、ヴェーバーと批判者達(就中ヴェーバー批判の原型を打ちだした「フレンターノ」の用語の概念規定の相違を検討しつつ、ヴェーバーのすぐれた理論構成を浮彫りするという方法で、ヴェーバー論文の意図するところを余すところなく再現してみせた。大塚氏の論攷は混乱した論争を整理しただけでなく、論争自体に終止符を打つたようにさえ思われる。しかし、他方でヴェーバー論文に対する誤解がまだ根強く残っていることも事実である。この論文の誤解からヴェーバーがマルクスへの対向者としてのみ扱えられることさえ少なくないのである。

二

R・グリーンによって編集された本書は、論争の現段階を整理して読者に論争史全体の概観を与え、更にヴェーバーの提起した問題を一層明確にすることを企図したものである。小冊子であるため、

掲載された論文は殆んど抜粋であるが、それぞれこの論争におけるさまざまな見解を代表し、同時に論争に参加した学問の諸領域をも代表するように配慮して厳選されている。各論文は出典が明確にされ、巻末にはこの問題に関する参考文献の目録も添えられている。冒頭の編者による序文がそれぞれの掲載論文の意義についてふれているので、それに従って掲載論文を紹介しておきたい。第一の論文はヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の英訳書からの抜粋でヴェーバーの研究の意図が制限された性格のものであったことについて読者の注意を喚起するために載せられている。第二の論文はハーバード神学論叢からK・フレルトンの「カルビニズムと資本主義」がとりあげられる。これはヴェーバーの論証の要約を読者に提供している。第三の論文は、数少ないヴェーバー支持者の一人E・トレルチの「キリスト教会と集団の社会理論」の中からカルビニズムの役割に関するヴェーバー理論に最も関係の深い部分を抜粋したものである。第四の論文はW・ゾムバルトのもので、「ブルジョワ」の英訳「資本主義の精髓」からとられ、本書では「資本主義精神の形式における宗教の役割」という題が付けられている。第五の論文はR・トーニーの「宗教と資本主義の興隆」というあまりにも有名な労作からとられている。第六の論文はW・ハドソンによる「ピューリタニズムと資本主義の精神」で、カルビニズムについての多くの議論はさまざまな表現にもかかわらず過当な単純化という共通の誤ちを犯しているとし、ヴェーバーの論文はその特に著しいものと批判している。彼はまた、宗教的変革が経済的変革を生み出す要因となったなら、逆に宗教的変革が経済的運動の結果として現われることも考えられるだろう、というトーニーの

有名な論拠を支持して、ヴェーバーが因果関係の相互的な性質に当然の注意を払わなかったことが単純化を促進したとしている。第七の論文はH・セエの「近代資本主義の発展にピューリタニズムとユダヤ人はどれほど貢献したか」(Revue Historique, Vol. 155)である。これは本書の中で最も短い抜粋だが、彼もハドソンと同じくヴェーバーの過当な単純化にふれ、それが宗教的な部分だけでなく、経済的な部分にもみられると主張している。第八の論文はH・ロバートソンの「経済的個人主義の勃興の見方」と題するもので、近代資本主義の発展における決定的要因として精神的要因より物質的要因に力点をおいている。第九のA・ファンファニの論文「カトリシズム、プロテスタンティズムと資本主義」はこの論争にカトリックの教理を引きいれて、すべての論点を再分析し、資本主義がプロテスタントの出現以前に現われている以上当然カトリックがこれを育成したとみるべきだと結論づけた。第十の論文「プロテスタント改革派の経済観」はA・ヒムによるもので、豊富な史料を駆使して、経済行為に関する教理の点で、プロテスタンティズムはいかにしても進歩的ではなかったのであり、それ故近代資本主義の発展に何らの決定的要因をもち得なかったことを示そうとした。最後にE・フィショップの「プロテスタンティズムと資本主義の精神——論争史」が収められている。フィショップはこの論文で、ヴェーバーの意図を正しく把握し、批判者達の誤解を指摘している。また批判者を誤解に導いた「理念型」というヴェーバー特有の方法についても、更にまたヴェーバー論文の欠陥にも若干ではあるがふれている。

三

論争史を理解する上で、フィショップの論文は特に有用であると思われる。以下フィショップの論点の概略を紹介していきたい。

フィショップによれば、ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」における独創的な意図は彼の時代を背景にしてみられねばならない。歴史主義とマルキシズムは抽象的古典経済学による経済過程と経済人 (homo economicus) の分離した扱い方に対して共に戦ってきたが、ヴェーバーはこの二つの流れを受けて、文化の全領域と経済の決定的連関を確定すべく文化史を検証したのであった。そしてヴェーバーの研究のすべては究極的には現代ヨーロッパ文化の、とりわけ近代資本主義の理解を対象としていた。マルクスは近代社会理論における資本主義のもつ重要性を指摘したが、ヴェーバーはこのマルクスの唯物論的発想に大きな有効性を認めながらも、それを社会科学の唯一の方法として絶対視することに反対した。マルクス主義者の経済決定論に対して、ヴェーバーは複数の相互作用をもつ理論を提出した。

ヴェーバー論文の目的の限定された性格と彼の理論構築の注意深い方法を明らかにすることが重要である。この論文で彼は資本主義の、あるいは宗教の完璧な理論を生みだそうとはしていない。また宗教と資本主義の関係を完全に扱うことをも意図していない。この論文は近代のエトス (ethos) の最も基本的で特殊な様相の一つを理解する仮説的試みとして目論まれた。ヴェーバーは歴史的観点から資本主義を反伝統主義、ダイナミズム、合理主義、計画的な長期の工業生産によって特徴づけられたユニークな組織として規定し、そ

れに適合する精神構造 (character structure) の起源を分析し追求しようとした。ヴェーバーによれば、近代資本主義は技術的發展の自動的産物ではなく、多くの物質的要因の産物であった。しかし、一つの無視し得ぬ要因がある。それは、人間行為における合理的・反伝統主義の精神である。この資本主義の精神が近代資本主義経済組織の発展にとって不可欠であった。ヴェーバーは、この経済的精神あるいは経済組織のエトスの発展に関する宗教的観念の影響を考察しようとしたのだが、経済的变化が宗教的要因によってのみ説明されると考えたわけではない。そうではなくて、むしろ経済的要因の基本的重要性を強調したのである。経済的变化が経済的必要に依りて起ること、さまざまな要因によって条件づけられていることをはっきり認めていた。ヴェーバーは資本主義がビュリタニズムなしでも起ったであろうこと、事実それは多くの文化の複合の中でなしとげられたこと、客観的条件が熟していないところでは起らなかったであろうし、起っていないことを認めている。それどころかヴェーバーはまた、宗教倫理そのものも宗教によってのみ決定されるのでなく、社会的環境、特に経済的条件が宗教的態度の性格と発展に及ぼした影響を研究する必要をも主張している。

それにもかかわらず、彼の論文に対する誤解が多い一つの理由は、彼の論文が不注意な読者に誤解されるような不完全さを構造上の基本的な弱点としてもっていたのである。ヴェーバー自身、フィッシャーの批判に答えて、論文で自分は宗教と経済の関係を全く明快に表現したけれども、あるいは言葉の性質から誤解が生じたかも知れない、と認めている。彼の論文のもう一つの欠陥は、読者の要求を無視したやたらに詳しい脚註であり、それはしばしば読者を本

論から遠く押し流してしまふかのである。

ヴェーバー論文に対する別の筋の通った批判は、大陸の特にオランダとライプランドの経済史の具体的研究に基づいている。資本主義が広汎に発展した最初の国家であつたはずのオランダの歴史の研究に基づいて、最近のネーデルランドの歴史家達（デヨング、クナッペル、ド・ペーター）はネーデルランドを通してカルピニズムと資本主義の間の関連を確証する根拠を何も見つけていない。更に一五六五—一六五〇年にかけてのネーデルランドにおけるカルピニスト教会の経済倫理についてのベインズの研究はヴェーバー論文と全く相反している。同様の見解はバアシュによるネーデルランドの経済史にも表われている。彼はヨーロッパで最も繁栄していたオランダの資本主義における非宗教的要因を強調した。同じことがドイツ、ハンガリー、スコットランドにおける資本主義の興隆についても言える。これらの研究はカルピニストの信条が資本主義を支持したとか、その出現を助けたというヴェーバーの仮説に反対している。しかしこの攻撃は、ヴェーバーがプロテスタントの倫理を資本主義の起源における主要な原因としていたとか、どこでもプロテスタントの倫理によって資本主義が必然的に決定づけられたと断定した、といったヴェーバー論文の俗流解釈に退化した。ヴェーバー論文のそのような単純な解釈がロバートソンや、彼に従っているヒムの論文の価値を落しめている。ブレンタノー、セエ、ビレンヌ、ブロードウニッツやフォン・シュルツェ・ゲヘルニッツのような学者もヴェーバーの論文を資本主義の発展の上にカルピニズムによって及ぼされた必然的、原因的影響を暗示するものとして解釈している限りでは、彼等はヴェーバーを誤読しているのである。彼の理論に関

する多くの批判は、彼の関心の方向、彼の節度ある目的、注意深い手順を了解しなかった。彼の批判者達で彼の論証の水準までのぼり、彼の誤ちや欠点がその独特の方法に固有のものであることを認めた者は極く少ない。そして、ヴェーバーの方法を攻撃した少数のもの、セエ、ロバートソン、ウォーカー、ボルケナウは社会科学の性質やそれに適用する方法に関する彼の著作を無視して攻撃した。

彼の理念型の方法は説明されるべき歴史的個体 (historical atom) の選択とその性格や影響の定義に偏向を感じさせ、その方法によって引きおこされた過当な単純化はまた、彼のプロテスタントの倫理の構成にも、ピューリタニズムの取扱いにも及ぶのである。経験主義的歴史家にとつて、それらすべての手順は経済的、政治的、技術的な、非宗教的要因の比較的無視される傾向をもつように思われる。ヴェーバーの個体分離の方法は、ある観点から重要だと思われる特定の構成要因の強調と分離の故に複雑な歴史的事実の単純化に導かれる。必法的にこの方然は總体的な歴史的問題の照明、時代なり運動なりの全体的解釈には役立たない。彼の方法はいかなる複雑な現象をもその構成要素に分解し、それから一つの定数として一つずつ選び、他の変数への影響を追求することとなつた。彼はそのプロセスの終局において各々の構成要素の変化する力を評価すべき、そして彼が先に公式化した理念型に経験的事象がどれだけ密接に接近したかを決定すべき一つの解答が得られると主張する。プロテスタントの倫理と資本主義の精神の関係という問題に対して彼が企てたのは、正にこれである。

結局、ヴェーバーの論文は資本主義の出現の上にプロテスタントの倫理が与えた決定的影響を後づける研究だというような通例の解

釈とは異なつて、宗教と経済の如き斯くも異なつた文化領域の適合の説明として解釈されねばなるまい。ウェーバーの理念型の方法に含まれている偏向は、殆んど注意を払われていない彼の後のキリスト教以外の宗教の社会学的研究においては中和されていることを強調しておく必要があるだろう。これらの研究でウェーバーは、物質的、地理的、経済的環境の異なつた文化の宗教と倫理に与えた影響を追求している。

ウェーバー論文の限られた目的と研究の注意深い境界と、統計的な証明や反証を許さない特有の方法、更に宗教社会学の体系的研究による独創的な力作の追加をみるならば、彼の研究は、その結果によつて正当化されたとみななければなるまい。

以上、われわれが行論の大部分を費して紹介してきたフィッシュOFFの「論争史」は、ウェーバーの理解において我が国の研究史が到達した水準にかなり接近していることがわかる。(オランダ史の理解を別にすれば)そのことは本書に収められた他の論者の諸論文と比較すればなお一層明らかであろう。

(Protestantism and Capitalism; The Weber Thesis and Its Critics, ed. Robert W. Green, Boston, 1959.)